

雪をわたつて・・・

私たちはあの日森へいってみた

北村 想

こんにちはみなさん。私は童話を書くようにして戯曲を書いてきました。そうして絵本を描くようにして芝居をつくります。この話もそういうふうにしてつくるつもりです。

「かつて子供であったことを大人はみんな忘れてしまっている。」とサン・テグジュペリは言いました。しかし大人になってからも、子供のようである人というのは、この社会では生きてはいきにくいのです。私はそういう社会が嫌いです。私が大人でなければならぬ社会というのが嫌いです。それに、私はこの社会の子供も嫌いです。やがては大人になる子供という連中が嫌いです。私はですから人間が嫌いなのだと思います。もちろんその集合には私も含めねばなりません。

私は思います。人間なんぞつまらない。馬鹿で自分勝手に身のほど知らずで生きぞこないで、つまりその、一冊の賢治の童話の本にもおよばないと。・・・もちろん、私だってその見本のような人間ですがね。・・・

ま、そんなふうにして、拗ねて甘えてひねくれているときなどは、せめてはこういう話も書きたくなるというものなのです。

登場人物

シロウ

カン子

狐のコンザブロー

狐たち 1

2

3

4

5

6

7

8

ケルルン博士

いまではずいぶんと田舎の小学校でなければ見られなくなったあの、木の椅子が三脚置かれて、シロウという男の子と、その妹のカン子という少女が、腰掛けている。

空いた一脚には絵本や童話の本の類がつまれ、シロウは絵本を読み、カン子は寒そうに手を擦りあわせている。

遠く聞こえるのは北風の震える声だ。

カン子「・・・寒いね。」

シロウ「・・・」

カン子「寒いねおにいちゃん。」

シロウ「・・・冬だからね。」

カン子「シロウにいちちゃんも寒い？」

シロウ「ああ、寒いよ。」

カン子「冬だからだね。」

シロウ「そうだよ。冬だからだよ。」

カン子「その本面白い？」

シロウ「分らない。」

カン子「なんて本？」

シロウ「『100万と一回めの猫』という本さ。」

カン子「読んで。」

シロウ「読んでるよ。」

カン子「声だして、読んでよ。」

シロウ「なんで？」

カン子「・・・冬だから・・・」

シロウ「・・・」

カン子「ね・・・」

シロウ「初めからかい？」

カン子「どつからでもいい」。

シロウ「そんな本の読み方はいけないよ」。

カン子「じゃあ、初めから」。

シロウ「・・・100万と一回めの猫・・・」

カン子「（うなづく）」

シロウ「百万回、いろいろな人に飼われたとら猫がいました。それぞれ違った人に百万回、その猫は飼われたのです。最初は船乗りでした。船乗りは海に落ちて死にました。猫はオンオンと涙を流して泣きました。次は大工でした。大工は屋根から落ちて死にました。猫はオンオン泣きました。次はどろぼうでした。どろぼうは捕まって死刑になって死にました。猫はオンオン泣きました。次はおんなのこでした。おんなのこは交通事故で死にました。猫はオンオン泣きました。次は老婆でした。老婆は寿命がつきて死にました。猫はオンオン泣きました。それからのべ百万回猫は飼われて、百万回オンオンとなきました。そうしてとうとう猫は野良猫になってしまいました。そうして一匹の白い猫と知り合いました。白い猫が子猫を生んだころ、とら猫は毒きのこを食べて死んでしまいました。白い猫が今度はオンオンと泣きました。百万と一回めでとら猫は自分のことを泣いてもらったのです。・・・オシマイ」。

カン子「それだけ？」

シロウ「そう。これだけ」。

カン子「・・・それ、何の話？」

シロウ「知らないよ。

カン子「よくわかんないね。

シロウ「うん。

カン子「きつと大人になったら分かるんだね。

シロウ「そうだろ。・・・

カン子「大人になったら、いろいろ分かるんだ。

シロウ「うん、でも・・・

カン子「・・・

シロウ「・・・

カン子「え？

シロウ「・・・寒いね。・・・

カン子「うん。

シロウ「・・・

カン子はさみしそうにうつむいた。シロウは別の絵本を開いたが、物憂げに空を見た。

タンゴだろうか、強くせつない音楽が聞こえてきて・・・溶暗する。

2

真っ白な舞台は堅雪の雪原に見立てられている。

シロウとカン子が端からやってくる。

シロウ・カン子「堅雪かんこ　しみ雪しんこ　堅雪かんこ　しみ雪しんこ・

雪は太陽の輝きを照り返して、ふたりの顔は明るい。

シロウ「すっかり雪が凍っています。大理石のようですよ。

カン子「お空は青い石の板のようですよ。

シロウ・カン子「堅雪かんこ　しみ雪しんこ　堅雪かんこ　しみ雪しんこ

シロウ「百合の匂いがしますか？

カン子「はい。

シロウ「木はザラメのようですよ？

カン子「はい。

シロウ「何処へいきますか？

カン子「何処へでもいけます。

シロウ「そおですよ。

シロウ・カン子「堅雪かんこ　しみ雪しんこ　堅雪かんこ　しみ雪しんこ

シロウ「森だ。森へきたぞ。

カン子「凍ってるね。

シロウ「つららだ。

カン子「つらら落ちるとどうなるかな。

シロウ「つらら落ちると頭にささるぞ。

カン子「つらら落ちないで。

シロウ「つらら落ちるなよ。

カン子「もう、落ちないよ。

シロウ「狐、呼んでみようか。

カン子「狐、呼べる？」

シロウ「狐、呼ぶよ。」

シロウ・カン子「堅雪かんこ しみ雪しんこ 狐の子は嫁ほしい嫁ほしい！」

しばらくシンとして、やがて森の木々の凍った枝が震える音が聞こえてきた。シャ
ララアんと、粉硝子のような音だ。

シロウ・カン子「堅雪かんこ しみ雪しんこ 狐の子は嫁ほしい嫁ほしい！」

同じように音がする。シロウとカン子、ふたり手をたたいた。
と、森の中から声がする。

声「凍み雪しんしん 堅雪かんかん・・・」

ふたり見ると、森から飛行服を来た男の人がひとり、出てきた。

男「凍み雪しんしん 堅雪かんかん・・・」

シロウ・カン子「？」

男「こんには、私は狐のコンザブローです。」

シロウ・カン子「??????」

なるほどよく見ると尻尾がある。それに飛行服から出ている手は狐のそれだ。
ああ、耳だつて、そうだ。でも、帽子も眼鏡もマフラーもまるで飛行士なのだ。

コンザブロー「凍み雪しんしん 堅雪かんかん。私は狐のコンザブロー。

シロウ「狐こんこん白狐 お嫁ほしけりやとつてやろ

コンザブロー「シロウはしんこ カン子はかんこ おらはお嫁はいらないよ

シロウ「狐こんこん 狐の子 お嫁がいらないきや餅やろか

コンザブロー「シロウはしんこ カン子はかんこ 黍（きび）の団子をおれやろか

カン子「狐こんこん狐の子 狐の団子は 兎（うさ）のくそ

コンザブロー「いえいえ、けしてそんなことはありません。あなたがたのような立派な利口なかが、うさぎのふんなんか召し上がるわけがありません。ほんとにほんとうの

黍の団子ですとも。

カン子「でも、狐つて人を化かして、兎やら馬やら牛の糞を食べさせるつて。

コンザブロー「そんなことはほんとうはないのです。それはむじつの罪というやつです。

私は全体いままで、人をだましたことはありません。

シロウ「そいじゃあ、狐が人をだますつて、嘘なのかい？

コンザブロー「ええ。

カン子「化かさないの？

コンザブロー「ええ。狐が人を化かすということは嘘です。けだし最もひどいそです。

だまされたという人は大抵がお酒に酔っぱらったり、臆病でくるくるしたりした人です。

シロウ「でもコンザブローさん、へんな格好しているねえ。それは飛行機に乗る人の服じゃ

ないのかい？

コンザブロー「そうです。変ですか。

シロウ「やつぱり化かすんじゃないのかい。

コンザブロー「いえいえ、これは私どもの少年学校の制服なのです。私どもは学校にいるときはこういう格好をしているのです。

カン子「狐に学校、あるの？」

シロウ「聞いたことないなあ。」

コンザブロー「狐、学校に行っちゃあいけませんか。」

シロウ「いけないことはないけれど。」

コンザブロー「それではシロウさんカン子さん、今度私たちの学芸会において下さい。幻燈やら芝居やら科学の特別授業やらやりますから、きつといらっしゃい。この次の雪の凍った月夜の晩です。七時から始めます。ほら、入場券をあげましょう。何枚要りますか？

シロウ「それじゃあ、五枚おくれ。」

コンザブロー「五枚というと、あなた方二枚と、あと三枚はどなたですか？」

シロウ「兄さんが三人いるんだ。」

コンザブロー「兄さんは十二歳以下ですか？」

シロウ「いや、みんな十二より上だよ。」

コンザブロー「それは残念です。十二より上は駄目です。兄さんの分は差し上げられません。」

カン子「どうして駄目なの？」

コンザブロー「十二より上は駄目なんです。あなた方だけいらっしゃい。特別席をとつておきますから。(チケットを渡した) 面白いですよ。」

カン子「面白そうだね。」

シロウ「狐少年学校学芸会か・・・」

コンザブロー「そのときは、黍の団子をおあがりなさい。ちゃんと私が畑を作つて、播いて草をとつて刈つて叩いて粉にして練つて蒸して、お砂糖をかけたものです。」

シロウ「うん、そうするよ。」

コンザブロー「それでは雪が柔らかになるといけませんから、もうお帰りなさい。私もう帰ります。キックキックキックキック、トントントン。さようなら。」

シロウ・カン子「さようなら。

コンザブロー「堅雪かんこ 凍み雪しんこ キックキックキックキック、トントントン。
シロウ・カン子「堅雪かんこ 凍み雪しんこ キックキックキックキック、トントントン。

コンザブローの姿が雪原の向こうの森の中に消えていった。

カン子「ねえおにいちゃん。

シロウ「え？

カン子「どうして十二歳より上は行けないんだろうね。

シロウ「うん。・・・

カン子「どうしてかな？・・・

シロウ「それはきつと、世界は不思議でいっぱいだからだ。

カン子「そうか。そうなのか。

シロウ「そうだよ。わっはっは。

カン子「わっはっは。

シロウ「わっはっは。

シロウ・カン子「堅雪かんこ 凍み雪しんこ キックキックキックキック、トントントン。

キックキックキックキック、トントントン。

シロウ「赤い木の芽が風に吹かれて光っています。

カン子「ピッカリピッカリ。

シロウ「お日様に銀の百合。

カン子「お日様に銀の百合。

シロウ「寒天にザラメの砂糖菓子は何ですか。

カン子「寒天にザラメの砂糖菓子は何かですか。

シロウ・カン子「堅雪かんこ 凍み雪しんこ キックキックキックキック、トントントン。
キックキックキックキック、トントントン。

二人、行ってしまった。

3

その森の奥ふかく、雪の広場に水気耕栽培の巨きなトマトの木があつた。その辺りが狐の少年学校だ。

月は空に高くのぼつた。森は青白い空気で包まれた。

狐少年学校の生徒たちが集まつてきて、狐1、2、3は芝居の準備をしはじめる。狐4と5と8は幻燈の準備をし、狐6は司会らしい。プログラムを見ている。狐7は受付だ。

シロウとカン子がやつてきた。シロウは絵本を、カン子は鏡餅をそれぞれ風呂敷にくるんで持っている。

狐7「こんばんわ。お早うございます。今まだ準備をしておりますが、入場券はお持ちですか？

シロウ「はい。持っています。（差し出した）

狐7「ふむふむ。・・・さあ、それではこちらへどうぞ。これは特等席の切符です。

狐たちはみな席についた。

シロウとカン子も用意された特別席に座った。

と、コンザブローがタキシードなんか着て現れた。

○ — ↑ トマト

—

— シーツ

+ — +

+ — + 台

・ ・ ・ 特別席

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

○ ↑ 幻燈機

狐たち

コンザブロー「(シロウとカン子に) こんばんわ。ようこそ。

シロウ「このあいだは失敬。それから、今夜はどうもありがとう。

コンザブロー「よくここが分かりましたね。ここが狐少年学校です。ここだけではありません。私どもの狐少年学校はこの森すべてです。この森で起きることすべてが私どもの学校の授業です。

カン子「お土産にお餅を持ってきました。どうか、みなさんで召し上がってください。

コンザブロー「これはどうも。お気をつかわせてすみません。どうか、ごゆっくりなすつて下さい。もうすぐお芝居やら幻燈やら始まります。

シロウ「コンザブローさんはこの狐少年学校の先生なんですか？

コンザブロー「そうです。そのようなものです。でも、人の社会とは違って、ここでは私も生徒です。私も森羅万象の一人の生徒です。(狐たちに) みなさん、人のシロウさんとカン子さんからお餅をいただきました。

狐たち「堅雪かんこ 凍み雪しんこ 硬いお餅はかつたらこ 白いお餅はべつたらこ。

コンザブロー「さあ、お座りになつてください。

シロウとカン子、再び座った。

コンザブロー「(台上がつて一礼すると) オホン。狐少年学校のみなさん。それから人のシロウさんとカン子さん。こんばんわ。今夜はたいそう美しい天気です。お月さまは真珠か銀のお皿です。お星さまは野原の露のキラキラした結晶です。空気はオゾンがたつぷりと静謐です。ただいまから狐少年学校の学校祭をはじめます。

狐たち拍手。シロウとカン子も拍手。

コンザブロー「今夜はもう一人、みなさんにはたいへんステキなお客さまがあります。その方を紹介します。狐少年学校の特別講師、ルンパランパ・ケルルン博士です。

狐6がラッパで可愛いファンファーレを吹いた。ケルルン博士が登場した。背の高い、キリンのような顔をした女の博士だ。医者のような、物理学者のような格好をしている。狐たち拍手。シロウとカン子も拍手。ケルルン博士は軽く会釈すると、シロウとカン子の隣に座った。

ケルルン博士「(シロウとカン子に) こんばんわ。ルンパランパ・ケルルンです。

シロウ「シロウです。

カン子「カン子です。

それぞれ握手した。

狐6が台の上に立った。

狐6「みなさん、おはようございます。こんばんわ。僕が司会を担当します狐のコン平です。よろしくおねがいします。

拍手

狐6「ではまず、今夜のお客様、ルンパランパ・ケルルン博士から、一言御挨拶をいただきますと思います。ケルルン博士、どうぞ。

ケルルン博士「(壇上に立つて) みなさん、こんばんわ、おはようございます。今夜はステキです。私はとてもこの日を楽しみにしていました。みなさんを見ているのはみなさんだけではありません。ごらんなさい。月が、太陽の灼熱の光線を透明の雲母の光に変えてしまう月が、そして、無限の星々が互いに点を線でつないで星座となつて、それから森に住む木霊やひとすじの影すらも、眼をこらしてあなたがたと私たちをみています。今夜はとてもステキです。(お辞儀する)

拍手

狐6「ケルルン博士でした。ケルルン博士にはあとで特別講義をお願いしてあります。では狐少年学校のみなさん、今宵最初のレパートリーは、幻燈とお芝居です。宮澤賢治という偉い人の作品を北村想という変な人が脚色いたしました、『注文の多い料理店』・・・演じますのは、狐のコン吉(狐1)、コン助(狐2)、コン太(狐3)の三名です。(ラッパを吹いた)

狐1、2、3がそれぞれの役の扮装をして出てきた。

狐1はウエイターのような格好。2はラーメン屋のような格好。3は英国の金持ちのような格好である。どうしてそういう格好をしているのかは、後で分かる。（：分らないかも知れない）

幻燈が『注文の多い料理店』とタイトルを映し、キャストを映し出した。それによると、『ぎやすと 金持ち——コン太 召使——コン吉 奴隸——コン助』となっている。

狐3「ああ、わしは金持ちなんだけど、金持ちというのは、どうも退屈でいかな。金に

まかせていろいろな遊びをやつて、もうやり飽きてしまったな。おい、召使。

狐1「はい、旦那さま御用でしょうか。

狐3「うん、お前はな、お前は犬だ。

狐1「え？

狐3「お前は今日から犬をやれ。

狐1「なんです？

狐3「そりやお前、退屈だからだ。なんか、文句あるのか？

狐1「いえ、めつそうもございません。私は犬です。犬でございます。

狐3「よし、ないてみる。

狐1「ワンワン。

狐3「よしよし、なかなか元気のいい犬だな。よしよし、それじゃあ（と、靴をぬいで）

これを投げるから、拾つて帰つてこい。（投げる）

狐1「はい。ワンワン。（拾つてもどつてくる）

狐3「こら、お前は何だ！

狐1「はい、私めは犬でございますが。

狐3 「犬が靴を手で持ってくるのか、ん？

狐1 「ああ、そうでございました。

狐3 「口でくわえてもどつてこんか。それ、もう一度やるから、しつかりやれよ。

狐1 「はい。ワンワン。

狐3 「(投げる)

狐1 「ワンワン。(くわえてもどつてくる。)

狐3 「よしよしなかなか利口な犬だ。褒美に首輪をしてやろう。(首輪をする)

狐1 「ワンワン。

狐3 「お座り。おまわり。チンチン。おしっこ。おたんちん。えんがちよ。(などとひとしきり芸をやらせるが)・うーん飽きたな。わしはなんでもすぐに飽きるからな。おい、奴隷！

狐2 「はい。旦那さま。ここにおります。

狐3 「おお、そこにいたか。ところでお前は今日は奴隷ではない。今まで、鞭で撃つたり、棒でぶつたり、竹でつついたり、縄で縛ったり、浣腸したり、コーラだといって醬油を飲ませたり、唐辛子を尻に突っ込んだり、毛をむしったり、鼻やら耳に穴をあけたり、腹を蹴ったり、いろいろしたことは悪かった。今日はな、立場を変えてみよう。わしが奴隷をやるから、お前はわしをやれ。どうじゃ。

狐2 「え、そうしますと、今日は私が旦那さまですか？

狐3 「そうだ。わしは奴隷だ。

狐2 「どうしてでがす？

狐3 「ま、退屈したんで気まぐれだ。

狐2 「そうですか。私はきょうは奴隷ではないんですね。

狐3 「そうだ。お前はわしだ。どうだ面白いだろ。

狐2 「それでは、おい奴隷！

狐3 「なんだ！

狐1・2 「へへい。

狐2 「いけませんよ。奴隷がそんなにえばっちゃ。

狐3 「いやあすまんすまん。いつものくせがなかなかぬけんもんでな。ゆるせよ。

狐2 「おい奴隷！

狐3 「へへい。．．こんなもんでどうかな。

狐2 「いいですね。

狐3 「へへい。

狐2 「おい奴隷、こうしてやるこうしてやる。（突き倒して蹴る）

狐3 「うおっうおっ．．．

狐2 「おい奴隷、こうしてやるこうしてやる。

狐3 「（怒る） まてこら！痛いぞ。

狐2 「何を言うか。わしは御主人だぞ。（なおも蹴る）

狐3 「やめた。奴隷ごっこやめた。

狐2 「もうやめるんですか。

狐3 「もう飽きた。

狐2 「ほんとにもう、わがままなんだから。

狐3 「よし、その代わり、お前ら二人で、卓球をやれ。

狐1・2 「ええ！卓球ですか。

狐3 「そうだ。卓球だ。早くやれ。

狐1・2 「顔を見合わして．．」

狐3 「何をやってるんだ。卓球をやらんか。

仕方無く、狐1、2は「卓球」を始める。といつてもラケットも球もない。ラケッ

トの代わりに掌で相手を頬を殴りあうという「卓球」だ。

狐3 「よしよし、次はな、お互いの髪の毛に火をつけろ。

狐2 「できませんよ、そんなこと。

狐3 「嫌なのか。いやなら、殺すぞ。おい、犬の召使、鉄砲持つてこい。

狐1 「ワンワン。（鉄砲とりに去る）

狐2 「すいません。やります、やりますから、命ばかりは。

狐1 「ワンワン。（鉄砲をもつてきた）

狐3 「いや、もういい。お前の髪の毛に火をつけるのは、飽きた。飽きたから、よし、これから狐でも撃ちに行こう。森へいくぞ。森へ行つて狐やら鳥やらリスやらマングースやら、なんでもいいからこの鉄砲でぶつ殺そう。

狐2 「そうですね。それが面白いですよ、きつと。はい。森へいきましよう。森へ行つて狐やら象やらもう、何でもかんでもぶち殺しましよう、はい。

狐1 「ワンワン。

幻燈に『森』という文字。

森にやってきたらしい三人。

狐3 「いやあ、何だいたい。せっかく森へ来たというのに、ぜんたいどうもけしからんじゃないか。鳥も狐も一匹もないじゃないか。何でもいから早いとここいつでズダダンとやりたいのに、つまらんな。

狐2「そうでございますね。まったくけしからんですね。そいつで鹿の黄色い横っ腹なんぞに二、三発お見舞い申したら、もう愉快でしょうね。鹿なんかくるくるまわって倒れますですよ。」

狐3「代わりに奴隷、お前でも撃とうか。」

狐2「めつそうもございせんです。きつとこうなったのも、召使の犬の働きが悪いからですぜきつと。」

狐3「そうだな。じゃあ、犬を殺すか。」

狐1「ワンワン。冗談じゃありません旦那さま。」

狐3「そんなら早いとこ、狐をさがしてこい。わしはもう腹が減ったぞ。ああ、こいつで早くズドドーンといきたいなあ。」

狐1「早くとは言いまして、私も今日初めて犬になったもんですから、なかなか鼻がききませんで。」

狐3「わしは腹が減ったぞ。どこかに飯を食わせるところはないのか。」

「ごごおつという風の声。」

狐3「なんだあれは？」

狐1「風でござんしょ。」

狐3「うーん、寒いぞ。腹が減った。」

狐1「あ、旦那さま、あんなところに。」

幻燈に次のように文字。

+	-	-	-	-	-	+
				RESTAURANT		
				西洋料理店		
				wildcat house		
				山猫軒		
+	-	-	-	-	-	+

狐3「これは何だ？何と書いてある？

狐2「さあて、なんざんしょねえ。私は学がないもんですから、字が読めないんでございますだよ、旦那さま。

狐3「これ、犬、お前読んでみろ。

狐1「旦那さま、字が読めないんですか？ワンワン。

狐3「よけいなこと言わずに読んでみろ。

狐1「レストラン、山猫軒。

狐3「何、レストラン。すると、これはレストランか。

狐2「さいでござますね。

狐3「そうすると、飯が食えるんだな。

狐1「そのようです。ワンワン。

狐3「最近森も開けてきたじゃないか。こんなところにレストランか。これもみな、我々のような人種が、野蛮な連中を教育したおかげだぞ。な。

狐2「さいでござます。

幻燈の文字。

—どなたもどうかおはいりください。
—決してご遠慮はありません。

狐3 「これはどういう意味かな。

狐1 「ただで食わせてくれるんでしょうか。ワン。

ドアを開けた。

幻燈の文字。

—ことに肥ったお方や若いお方は、大—
—歓迎いたします。

狐3 「ほほう。そうすると我々は大歓迎されるわけだな。

狐2 「肥ってますし、若いですしね。

狐1 「しかし、妙な家ですね。さつきから戸ばかりいっぱいありますよ。ワンワン。

狐3 「これはな、ロシア式なんだ。ロシアでは寒いからみんなこうなんだ。お前らは学も金もないから知らんだろうが。

ドアを開けた。

幻燈の文字。

＋
— 当軒は注文の多い料理店ですからど
— うかそこは御承知ください。
＋

狐1「繁盛してるんですね。ワン。

狐3「こういうところの料理屋が今時は流行るんだ。

ドアを開けた。

幻燈の文字。

＋
— 注文はずいぶん多いでしょうがどう
— かいちいちこらえてください。
＋

狐3「これはぜんたいどういうことかな？

狐1「これはあれですよ、旦那さま。注文する客が多いんで、したくが手間取るけれども
ごめんくださいと、いうことですよ。

狐3「そうかそうか。よしよし。しかし、部屋はまだかな。

狐2「ドアばかりですね。

狐3「わしは早いとこ座りたいんだがな。

ドアを開けた。

幻燈の文字。

＋
— お客さまがた、ここで髪をきちんと—
— して、それからはきものの泥を落と—
— してください。
＋

狐3 「ほお、なかなか作法がきびしいところだな。

狐2 「きつと偉い方がたびたびいらつしやるんですね。

狐3 「そうだな。ここには奴隷は来ないな。わつはつは。

髪を撫で、靴の泥を落とす。

風の声。

幻燈の文字。

＋
— 鉄砲と弾丸をここに置いてください—
＋

狐3 「なるほどそりやそうだな。(鉄砲を置いた)

幻燈の文字。

そうした。

幻燈の文字。

— どうか帽子と外套と靴をおとりくだ
— さい。

— ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡
— 財布、その他金物類、ことにとがつ
— たものは、みんなここに置いてくだ
— さい。

狐3 「これはまた、どうしてかな。

狐1 「山の中の森の中ですから、雷でも落ちると危ないからじゃないでしょうか。

狐3 「おお、そうだ。そうだな。ふんふん。

そうした。

幻燈の文字。

— ここで衣類をお脱ぎください。

狐3 「何、着ているものを脱げというのか？」

狐1 「御飯の前にシャワーでも浴びるんじゃないでしょうかね。ワン。

狐3 「おお、そうだ、そうだ。今の時代はなんでもシャワーだ。

狐2 「旦那さまここにバスタオルがございました。

狐3 「おお、そうか、そうか。

着ているものを脱いで、バスタオル一枚になる。

四角い大きな箱（セメントをこねるのに使うような）が出てくる。

幻燈に文字。

— 一箱の中の白い粉を身体にまんべん

— く、ぞんぶんにまぶしてください。

狐3 「これはどういうことかな？」

狐1 「新しい石鹸か何かでしょうきつと。

狐2 「旦那さま。おまぶしもうしあげます。

狐3 「よしよし。お前らも互いにまぶしあえ。

お互いにまぶしあう。
真つ白になる。
幻燈に文字。

＋
いろいろな注文が多くてうるさかった－
－でしょう。お気の毒でした。もうこ－
－れだけです。どうかからだじゅうに－
－塩と胡椒をよくもみこんでください－
＋

狐3 「うーん、これは変だぞ。

狐1 「変ですね。

狐2 「変ですね。

狐3 「ふつう、注文というのはこちらからするものなのに。これじゃあ、まるで我々が食われるようじゃないか。

狐1 「そうかも知れませんか。

狐2 「わたしたち、食われちゃうんですか？

狐3 「うーん、これはどうやら逃げた方がよさそうだな。こりゃあ、きつと狐に化かされ
たんだ。

と、唸り声がする。

狐1 「狐じゃないですね、あの声は。

狐3「あつそうか。この店の名前からすると、ありや山猫だ。

狐2「そうすると私たち、山猫に食われるんですか？

狐3「そうだな。わつはつは。山猫に食われるんだ。

狐2「どうしましょう。

狐3「観念するしかないな。しかし、わしは金持ちに生まれて、好き放題に暮らしてきて、もう思い残すことはない。お前らはどうじゃ？

狐1「私はもう犬ですからワンワンですよ。

狐2「私も奴隷に生まれて、好き放題にされてきましたから、もうどうなってもあんまり変わりません。

狐3「山猫のやつ、今日は満腹じゃな。わつはつは。

狐1「ワンワン。

狐2「へい、らつしやい！

三人、やつぱり肩よせあつてさめざめと泣く。
幻燈の文字。

＋　　　　＋
－おしまい－
＋　　　　＋

演じた三人がお辞儀する。

拍手。

三人は仏頂面してそこに立って残っている。

司会の狐6が登場。

狐6 「宮澤賢治さんの原作で北村想の脚色による『注文の多い料理店』でした。演じた役者を紹介します。コン吉、コン助、コン太。・・・ではこれから感想会を始めます。何か意見や感想のある人はどうぞ。

シロウ 「反省会のようなだね。

カン子 「そうだね。

狐6 「人のシロウさん、何か意見か感想がありますか？

シロウ 「突然のことにあわてて」 え、はいえつとその・・・面白かったです。

狐6 「どこが面白かったですか？

シロウ 「どこといわれても、みんなです。全体です。すみません。

狐6 「他になにかある人？

狐5 が手を挙げた。

狐6 「はいコン六さん。

狐5 「コン六です。ちょっと聞きますが。

狐6 「誰に質問ですか？

狐5 「えつと、誰でもえんだけんど、出演した人にです。

狐6 「はいどうぞ。

狐5 「このお芝居の、テーマは何ですか？

狐6 「(出演者に) 誰か、答えてください。

狐1、2、3 顔を見合わせて牽制しあっているが。

狐1 「えつと、これはその、イロモノ役者は所詮いろいろものだというのがテーマです。

狐6 「だそうです。

狐5 「はい。よく分かりました。

狐6 「他に？

狐7 が手を挙げた。

狐7 「えつとお、質問なんですがあ、奴隷があ、なんでえ、ラーメン屋のお、服というか衣装というかあ、着てえ、いるんですか？

「そうだ、そうだ」とざわつく客席。してやったりという顔の狐7。

狐6 「どうしてですか？

狐2 「えつとお、これはあ、北海道にいった時い、そのお、ある場所のお、有名なあ、ラーメン屋にい、奴隷のような店員がおったもんでえ、そうしました。

狐7 「そんなことは、見ている人には分からないと思います。（ちよつと憤ったふう）

狐2 「それでも、これはあ、脚色のほうでえ、そうなつとつたもんでえ、・・・

狐7 「そうしたらあ、たとえばあ、脚色のほうでえ、なんかあ、お化けみたいなあ、衣装とか指定があれば着るんですか？

狐2 「まあ、着ます。

狐7 「そういうのつて、主体性がないと思います。

狐1、2、3 顔を見合わせて・・・

狐3 「今度から、もつとシタイ性のあるのにしたいと思います。（ふてた）

狐6「他には・

狐8が拳手した。

狐6「はいどうぞ。

狐8「恥ずかしそうに」えっと、私は、とてもよかったです。主体性があるのかどうかは、私はそのまあ、でも、白い粉にまぎられて、いえ、まぎさら、いえ、まぶされて、みんな一生懸命で熱演はやっぱり見ていて、伝わってきてその、テーマというか、伝わってくるものというか、その心に何か訴えてこられて、何かこれは、金持ちのいやらしさとか、残酷とかいうんじゃないかって、その、そういうものをこえて、テーマも大切なんです、大切だと思うんだけどね、そういうなんか、知らないけれど、よくやったというかあ、見ていて伝わってくるものがあって、あ、この人たちは、ほんとうに、なんというか、やっぱり、・・・どう言っているのかよくわからないんだけど、お疲れさまでした。（座った）

場がちよつと白けた。

それまで真面目な顔をしていた狐6、突然へっへっへと笑うと、

狐6「ではこれで、高校演劇ごっこを終わります。

狐たちきやつきやつと拍手。

シロウ「なんだ、いまのもお芝居だったんだ。
カン子「なんだ。どうも変だと思った。

狐6 「では続いて、狐のコン作と、不肖、私によりますアホーマンス、『魔法の兄弟』を
ごらんいただきます。これは坪田譲治という偉い作家の有名な童話をモチーフにして、
北村想という変な作家が脚色した変なアホーマンスです。（お辞儀した）

拍手。狐4が私学の小学生のような格好（というのはつまり、黒い半ズボンに白
いカッターシャツ、てっぺんが四角い学生帽をかぶっているということだろう）
で、透明の傘をさして現れた。顔も白粉をぬったように真っ白だ。
琴の調べ・・・

狐4 「我と来てあそべや親のない雀今日から明日はサラダ記念日・・・

狐6 「ブーン。（と、飛行機のように現れる）お兄ちゃん、お兄ちゃん。

狐4 「なんだ、お前は？」

狐6 「弟。

狐4 「弟よ、気にシミ玉を子と泣かれ、きのうも今日もカラダ記念日。

狐6 「何言ってるの？」

狐4 「歌を詠んでいるんだよ。

狐6 「へーえ、豚を呼んでいるのか。どこから豚がくるんだ？」

狐4 「そういうつまらないことを言うお前はいつたい誰なんだ？」

狐6 「だから、弟だって、お兄ちゃん。

狐4 「そうすると、俺はお前の兄貴だな。

狐6 「そうだよ。

狐4 「するとこれは、利口な兄貴と馬鹿の弟の物語か。

狐6 「そうかもね。

狐4 「なるほど。（と、眼をとじてムニャムニャ言っている）

狐6 「ねえ、お兄ちゃん、今度は何してんの。

狐4 「ほんとうをいうと、お兄ちゃんはね、今、魔法を使っている最中なんだ。

狐6 「魔法？

狐4 「そうだ、魔法だ。

狐6 「お兄ちゃん魔法つかえるの？

狐4 「ああ、小学生も、お兄ちゃんくらいになると、魔法が使えるんだよ。

狐6 「どんな魔法？

狐4 「お兄ちゃんね、あんまりいい陽気なもんだから、こうやってお庭に出てきたらね、ほら、お庭にはこんなに芥子の花が咲いていたんだ。

狐6 「ほんとだ、芥子の花だ。

狐4 「そうしたらね、なんだか魔法が使えるような気がしてきたんだ。

狐6 「どうして芥子の花を見ると、魔法が使えるの？

狐4 「お兄ちゃんは理屈をいう子は嫌いだよ。

狐6 「理屈って何？

狐4 「そういう質問をする、それが理屈だ！

狐6 「そいで？

狐6 「・・・それでね、魔法を使うことにしたんだ。

狐6 「魔法、使ったの？

狐4 「ああ、使ったとも。

狐6 「どんな魔法？

狐4 「蝶を呼び寄せたんだ。

狐6 「丁ってサイコロのあれ？・・・半、丁！

狐4 「お兄ちゃんはそのいう、つけこんで、人の口先につけこんで、チャチャをいれるのは嫌いだよ。

狐6 「お兄ちゃん、何言ってるのかわかんない。口先につけこむって、何？」

狐4 「お兄ちゃんは口先が漬物なんだ。」

狐6 「ますますわかんない。」

狐4 「わかんないか、：稚内は北海道だ。まあいい。とにかくお兄ちゃんはね、魔法を使っ

たんだよ。いいかい、蝶々をここに来いって、言っただ。」

狐6 「蝶々をここに来いって、変な日本語だね。」

狐4 「そういう日本語は、お兄ちゃんにはゆるされているんだ。」

狐6 「言い間違いじゃないの？」

狐4 「いい間違いも悪い間違いもあるもんか。」

狐6 「蝶々は来たの？」

狐4 「来たよ。」

狐6 「何処に？」

狐4 「もう、いつちゃったよ。」

狐6 「何だ。嘘なんだ。」

狐4 「嘘じゃないよ。」

狐6 「じゃあ、もういつぺん呼んでよ。」

狐4 「そんなに何度も呼べるもんか。」

狐6 「ねえ、どうやって呼ぶの？」

狐4 「それはね、頭の中で蝶よ来い、蝶よ来いってつぶやくんだ。」

狐6 「なんだ、そんなことなら僕にもできらあ。」

狐4 「出来やしないさ。」

狐6 「出来るよ。」

狐4 「駄目だよ。お前はまだ早いんだ。」

狐6 「簡単じゃないか。蝶よ来いって頭ん中で言うんだろ。」

狐4 「駄目だ、駄目だ。お兄ちゃんね、いろんな魔法の本を読んでいるんだ。だから出来るんだ。」

狐6 「どんな本？」

狐4 「『空想と科学』とか、・・

狐6 「あれ魔法の本け？」

狐4 「魔法以外の本もいろいろ読まないと駄目なのさ。」

狐6 「『空想と科学』なら僕だつて読んだよ。」

狐4 「お兄ちゃんね、あの中の「えんげき論講義」も読んだんだよ。」

狐6 「嘘だい。お兄ちゃん、きつとあそことばしたよ。あの本はあそこ難しいもん。」

狐4 「いいんだよ、書いた本人だつてよく分かってないのに決まつてるから。」

狐6 「そうかな。」

狐4 「お兄ちゃんね、他にもいろいろ読んでいるんだ。○○○とか、○○○○とか（いかにも難しそうな本のタイトルを並べる）」

狐6 「いいよ、そんなの読まなくつたつてでだらあ。蝶よ来いって言えいいんだもん。」

狐4 「ふっふっふ、君に出来るかな。・・・」

狐6 「やつてやらあ。蝶よ来い、蝶よ来い。・・・」

狐4 「蝶よ来るな。蝶よ来るな。」

狐6 「蝶よ来い。来たら、甘い蜜をあげるぞ。」

狐4 「蝶よ来るな。来たら、針千本飲まして茶漬にして食つてやるぞ。」

狐6 「蝶よ来い。来たら、美味しいケーキをあげるぞ。」

狐4 「蝶よ来るな。来たら、煮えたぎった油で羽根を蒸すぞ。」

狐6 「なんだい、それは。蝶よ来い。来ないとジュースをあげないぞ。」

狐4 「君はなんて想像力が貧困なんだ。蝶よこんな貧困のジュースなんか来ちゃ駄目だ。」

狐6 「こういう日本語だそれは。」

狐4 「ふっふっふ・・・どうだい、蝶なんか来ないだろ。やっぱりお兄ちゃんがやらないと駄目なんだよ。

狐6 「じゃあ、やってくれよ。

狐4 「よし、そこまで言うのなら、やってあげよう。ごらん、あそこに坊さんが来たら。あの坊さんを蝶に変えてやるよ。

狐6 「うわあほんとすげえなあ。早くやってよ。早くつてば。ほら、坊さん行ってしまうよ。

狐4 「うるさいな。そんなにうるさくすると、坊さんだつて聞こえていくだろ。

狐6 「変な日本語・・・

狐4 「黙るんだ。静かにしないと魔法は効かないんだから。・・・坊さん、坊さん、蝶になあれ。坊さん、坊さん、蝶になあれ。

狐6 「ああ、坊さん、行ってしまったよ・・・

狐4 「坊さんはあの世で蝶になったんだ。

狐6 「ちえっ、やっぱり嘘なんだ。

狐4 「そんなこと言うのなら、お兄ちゃん、お前なんか蝶々にしてやるぞ。

狐6 「わーい、してしてして、僕蝶々好きだもん。蝶になりたいなあ。

狐4 「蝶になったら、もう家に帰つてこれないんだぞ。

狐6 「いいもん。飛んでかえっちゃうもん。

狐4 「飛んできたつて、追い出されるんだぞ。

狐6 「いいもん。早く蝶にしてよ。してしてして。

狐4 「そんなにしてほしいのか。

狐6 「うん。してしてして。

狐4 「よし、じゃあ、今日お兄ちゃん学校から帰つて来る時、何かに姿を変えて帰ってくるからそのつもりでいろよ。

狐6 「なにそれ？

狐4 「だから、お兄ちゃん、風になって帰ってくるから驚くなよ。むっふっふっふっ、わっはっはっは。

狐6 「蝶々はどうなったんだ？・・・

狐4 「お兄ちゃんはな、風なんだ。風の精なんだ。オルフェなんだ。

狐6 「僕を蝶に変えるんじゃないのか？

狐4 「風さそう花よりもなお我はまた今日も明日もマダラ記念日。なっはっはっはっ。

狐6 「誤魔化してら。

狐4 「さようなら、お兄ちゃんはさらばだ。（去った）

狐6 「ちえっ、変な日本語。

溶暗して、豆腐屋のラッパを遠くに近くに聞くと、明るくなって狐6が魔法の呪文を唱えながら立っている。狐4がランドセル背負って帰って来た。

狐4 「君々、何をしているの。

狐6 「あ、お兄ちゃん、風になって帰ってくるんじゃないの？

狐4 「表の門まで風になっていたけど、そこからやめて入って来たんだ。

狐6 「また嘘言ったら。

狐4 「嘘じゃないさ。

狐6 「僕なんか、今呪文を唱えていたんだぞ。

狐4 「どんな呪文だ？

狐6 「その呪文を唱えると、世界中のすべてのものが灰になるという呪文だ。どうぞごいだろ。

狐4 「はっはっは。君にそんな文学的な呪文が唱えられるわけがあるもんか。お兄ちゃん、はな、もっとすごい呪文を知っているんだ。

狐6 「どんなの？」

狐4 「それを唱えるとな、どんなつまんない物語でも終わらせることができるんだ。

狐6 「そんなの唱えたら、これ終わっちゃうよ。

狐4 「駄目さ、もう唱えたんだから。

狐6 「ええ！

狐4 「ほら、耳をすましてごらん。歌が聞こえてきたろ。ものみな歌で終わるのさ。物語が終わるんだよ。この話もこれで終わりさ。

耳をすますと、確かに歌が聞こえてきた。

狐6 「（泣く） エーンエーン。

狐4 「何泣いてんだよ。

狐6 「だって、このまま終わったら僕たち全然意味ないもん。これ、何の話だったんだよお！

狐4 「いいじゃねえか、意味なんかなくなっちゃったて。

狐6 「良くない！

狐4 「俺なんか役者始めてからこつち、こういう意味のないのばつかずうつとだぞ。

狐6 「僕、意味が欲しい。

狐4 「バカ、いいかよく聞け。俺たちのこういうのをナンセンスの力学というんだ。俺たちのようなのがいてこそ、別のところで意味あるセンシビリティというのが輝くん。俺たちのようなのと、俺たちのようでないのと、な、この世界はこの宇宙は、そういうふたつの素粒子が紡ぎ出す織物のようなものなんだ。

狐6 「あ、なんでえ、自分だけ難しそうな台詞言いやがって。僕、センシビリティのいい方にまわりたい。

狐4 「これでも、さっきの犬や奴隷のイロモノよりはましだろうが。

狐6「そりやまあ、そうだけど。

狐4「あいつらなんて永遠にあれだぞ。永遠にイラッシャイマセエだぞ。さ、泣いてないで、立つんだ。立って歌え。ものみな終わる歌をうたえ！

歌う。

狐4・6 ♪ 意味泣き者よ う 耐え

も 飲みな お ÷ う 他を

勝ち泣き者は われらに 非ず

す 澄め 河の流れの 語 解く

A ♪ よ ええ炎よ も 獲よ

われら 個々に 龍なり

溶暗。

狐6「(司会にもどって) どうもありがとうございました。アホーマンス『魔法の兄弟』でした。

シロウ「きたいなお芝居だったね。

カン子「あんなの誰だってできるね。

狐6「(というカン子の言葉を耳にして) では、ここで、人のカン子さんが何かやってくれるそうです。

狐たち拍手。

カン子「ええ?!

シロウ「ばかだな。あんなこと言うからだぞ。あの司会の狐、怒っちゃったんだ。

カン子「いいよ。あんなのでいいのならカン子にだって出来るよ。

狐6「人のカン子さん、何をやってくれますか?

カン子「(立って)では、道徳のお話をします。

シロウ「おいおいカン子、そんなの出来るのか?

カン子「簡単だよ。このあいだ学校で先生がしてくれた話をするだけだもん。

カン子、演壇まで出てきた。

カン子「それで狐のみなさん、これからもつと意味のある、ありがたいお話をします。これは人の小学校で先生がしてくれる道徳というお話です。その中で、今夜は『宝の茶碗』という話をします。えーと、むかしむかし、あるところに、えーと、王様が、えーと、強い、そのこわい、えーと言うことをきかないと恐ろしい王様がおりました。この王様は、宝物をあつめるのが好きでした。それで、いろいろ宝物をあつめていたのですが、もういっぱいあつめて、なんでもあるので、もう、ほんとうにいっぱい宝物を持っていたんですが、えーと、中でも宝の茶碗を大切にしていたのです。ある日のこと、王様が宝の茶碗を見えますと、どうしたことか茶碗がわれておりました。王様はたいそう腹をたてて、国中の焼き物師をあつめて、その宝の茶碗をもとにもどすように命じました。一年以内にもとにもどさないと、みんなの首をはねると申し渡しました。焼き物師たちは大慌てで茶碗をもとにもどそうとしましたが、宝の茶碗はそう簡単にはもとにもどりません。そこで村のはずれに住んでいる、茶碗つくりの名人のところに行きました。しかし、名人はみんなの申し出をことわったのです。それから一年たちました。王様はいよいよみんなの首を切ろうとしました。すると若者が、

もう少し待ってください、おねがいします。と言ったのです。それでもう一度茶碗つくりの名人のところに行ったら、もう名人は死んでいたのです。そこで若者は娘と二人で窯をさがしますと、なんとあの宝の茶碗が出てきたのでした。王様は自分が悪かったと思いました。こういうふうな友情は尊いものだということです。（お辞儀する）

狐たちそれぞれズッコケた。

カン子「なんなんだよお。」

狐6「あの、今の話は、ようするにどういう話なんですか？

カン子「だからあ、友情は・・・尊いという・・・」

狐6「ではケルルン博士に感想を聞いてみましょう。」

ケルルン博士「コンザブローさん、ちよつと。」

コンザブロー「はい。」

ケルルン博士「私の耳をつまんでください。」

コンザブロー「はい。（そうした）

狐6「ケルルン博士、感想は？」

ケルルン博士「ですから、このとおり、狐につままれたようだという事です。」

狐6「だそうです。カン子さん、今の話は何の話なんでしょう？

カン子「だから、今の話がいったい何の話なのかを話し合うのが、人の学校の道徳という

おペンキヨーなのです。」

狐6「ほんとにそうなのかなあ・・・」

カン子「だって、先生がこのあいだ、話してくれたんだもん。」

狐6「なんの話だかさっぱりわからないよ。」

カン子「そんなこと・・・これはね、大人になったらわかるんだよ。きっと。」

コンザブロー「みなさん、人の世界は難しいので、きっと今のカン子さんの話も通ずるのでしょう。

狐6「全然意味ないや。

狐たち笑う。嘲笑だ。

カン子「ウエーン、お兄ちゃん・・・

シロウ「ばかだな。

狐6「人のシロウさん、代わりに何かありますか？

カン子「お兄ちゃん・・・

シロウ「じゃあ、僕が、やります。

狐6「人のシロウさんどうぞ。

シロウ「僕は、このあいだ読んだ童話のお芝居をやります。狐少年学校にはセロという楽器はあるでしょうか。あつたら貸してください。

セロがきた。

シロウ「カン子、このあいだお兄ちゃんが話してやつたら、あれをやるから、お前も一緒に手伝いな。

カン子「ああ、あれね。よしてきた。

シロウ「あるときある村のはずれの水車小屋にセロ弾きの男が住んでおりました。男は毎夜毎晩一生懸命セロを練習しておりました。なにしろ楽団ではいつも楽長さんに注意されるからです。早く上手になりたい一心で、男は夜中ずつと、月の明かりの中でセロを弾いていたのです。男は名をゴーシュと申しました。

シロウ、セロを弾く。

カン子が燕のように飛んでくる。

カン子「ブーン、やれやれ、みんなに出遅れてしまった。みんなもうエジプトに向かったろうな。おやおや、雨だ。こんなときに、ついてないな雨だなんて。どれ、どこかに雨宿りできる場所はないだろうか。あ、あの小屋がいい。あそこにしよう。ぶーん。

シロウ、セロがうまく弾けないので、ふてくされて水をがぶがぶ飲む。
カン子の燕が飛んできた。

カン子「今晩は、今晩は。トントン。ちょっと雨宿りさせてください。

シロウ「だれだ、夜中にドアなんぞ叩くやつは？ホーシュ君か？

カン子「ツバメです。

シロウ「ほんとに驚く」ツバメ？！ 何で、ツバメが出てくんだ。

カン子「雨宿りさせて下さい。

シロウ「おいおい、猫じゃないのか？

カン子「ツバメです。

シロウ「ほんとに？

カン子「ほんとです。

シロウ「（独り言）カン子のやつ、まちがってやがる。しょーがないな・・・

カン子「雨宿りを・・・

シロウ「分かった。分かったから、入れよ。

カン子「ありがとうございます。

シロウ「なにかみやげはないのか？

カン子「そんなものありません。

シロウ「トマトとか。・・・

カン子「ありません。

シロウ「しょうがないな。・・・

カン子「おや、王子様、セロをお弾きになるんですか。

シロウ「セロは弾くが、僕は王子なんかじゃないよ。

カン子「そうですか。まだ雨もふつてますから、何か聞かせてください。

シロウ「冗談じゃない。もう帰れ帰れ。僕はいそがしいんだ。

カン子「そう言わずに一曲。

シロウ「困ったやつだな。何が聞きたいんだ。

カン子「トロイメライなんかどうでしょう。

シロウ「トロイメライ？ ロマンチックシューマン作曲のか？

カン子「そうです。

シロウ「よしよし、弾いてやる、弾いてやるから、それを聞いたら帰ってくれよ。

カン子「(拍手)」

シロウ「(トロイメライを弾く・・・弾き終わって) さあ、どうだもうこれでいいだろ。

カン子「はい、でも、今度は何だか音楽がおそわりたくなってきました。

シロウ「音楽だと。おまえたちのはその、ピーとかチーとか鳴くだけじゃないのか。

カン子「カッコウと啼きます。

シロウ「ツバメがなんでカッコウと啼くんだ。

カン子「かつこうの真似をします。

シロウ「そいで？

カン子「ですからけっこう難しいんです。

シロウ「むずかしいもんか、おまえたちのはたくさん啼くのがひどいだけで、なきようはなんでもないじゃないか。

カン子「ところがそれがひどいんです。たとえば「かつこう」とこう啼くのと「カッコウ」とこう啼くのでは、聞いていてよほどちがうでしょう。

シロウ「ちがわないね。

カン子「では、あなたには分からないんです。わたしらのなかまなら、カッコウと一万言ええ一万みんな違うんです。

シロウ「かつてだよ。そんなに分かっているのなら、何も俺のところへ来なくともいいじゃないか。

カン子「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。

シロウ「ドレミファもくそもあるもんか。

カン子「外国へ行く前にぜひ一度いるんです。

シロウ「外国もくそもあるもんか。いったいぜんたいお前らがどの外国へ行くっていうんだ。

カン子「エジプトです。ツバメは秋になるとみんなエジプトに帰ります。

シロウ「ややこしいやつだなお前は。

カン子「ですからどうしてもドレミファがいるんです。王子さまについて歌いますから、

どうか弾いてみてください。

シロウ「俺は王子さまやないて言うてやろ。

カン子「おねがいます。

シロウ「うるさいやつだな。それじゃ、三べんだけ弾いてやるから、すんだらさつきと帰るんだぞ。

シロウ、ドレミファを弾いてみる。

カン子「ちがいます。ちがいます。そんなではないんです。

シロウ「うるさいやつだなあ。じゃあ、おまえ一度やってみてくれ。ツバメのカッコウのドレミファというややこしいのをやってみてくれ。

カン子「カッコー。」

シロウ「なんだいそれは。それがツバメのカッコウのドレミファかい。おまえたちにはそれでは、ドレミファもハラヒレホレハレも第六交響曲も同じなんだな。

カン子「それは違います。

シロウ「どうちがうんだい。

カン子「難しいのは、これをいくつもつづけたのがあるんです。

シロウ「つまりこうだろ。

シロウ、「カッコー」と続けて弾く。

カン子「そうです。そのとおり。（一緒になって「カッコー」と啼く）

シロウ「おい、もういいかげんにしろ。俺はいそがしいんだ。用事がすんだらさつさと帰ってくれ。ほらもう雨だつてあがつたぞ。

カン子「どうかもういつべんだけおねがいます。あなたのは、いいようだけでも、どこかちがうんです。

シロウ「ぎげんなよ、俺がお前に教わってるんじゃないんだぞ。俺はいそがしいんだ。明日もこいつで仕事があるんだ。それを明日までに仕上げておかなきゃならないんだ。

また楽長に叱られるじゃないか。

カン子「どうか、たつたもういつべんです。

シロウ「しょうがないな。これつきりだぞ。

シロウ、「カッコウ」を弾く。カン子の燕は最初あわせて啼いていたが、もういとみえて、途中でやめる。シロウは次第に「カッコウ」に没頭してしまつて、ハツとわれに帰つた。

シロウ「ハッ。ええい、こんなばかなことをしていたら、俺は鳥になってしまう。ええい、もう出ていけ、出ていけ。

カン子の燕、大慌てで出ていつて窓ガラスを破つてしまう。

シロウ「なんだ硝子に、ばかだなあ。もう来るなよ。バカヤロー。

シロウ、また水をがぶがぶ飲むと、セロを弾く。
幻燈に字幕。

+	—	+
—	一次の夜	—
+	—	+

シロウ、相変わらずのセロ。と、また燕がやつてきてドアを叩く。

カン子「トントン、トントン。

シロウ「だれだこんな真夜中に。狸なら狸汁にしてくつてしまうぞ。

カン子「私です。王子さま。帰りそなたツバメです。

シロウ「ツバメ？またか。・・・まあ、いいや入つてこい。

カン子「王子さま、野ネズミの親子にはちゃんとパンをやつてまいりました。

シロウ「そうかそれは喜んでいただろう。ところで今夜は何の用だ？

カン子「はい。東のほうに貧しい狐の親子をみつけました。

シロウ「まったくお前というやつは、俺をてつきりワイルドの『幸福の王子』とまぜこぜにしてやるな。それで、その不幸な狐の親子に何かもっていつてやるのかい。

カン子「はい。もう私はエジプトに行くのはあきらめました。

シロウ「持つていつてやつてもよいが、もう俺にはやるものは何もないよ。

カン子「まだ、セロが残っているではありませんか。

シロウ「冗談言うな、これは俺の命の次に大切なものだ。

カン子「その命が危ないものもいるのです。

シロウ「ばかを言うなよ。これを持つていかれたら、俺は明日から何をして暮らせばいいんだ。

カン子「私だつてもうエジプトには行けませんから、ここで死ななければなりません。

シロウ「そんなことは俺の知ったこつちやないよ。

カン子「どうかこれが最後ですから。

シロウ「明日は演奏会なんだぞ。あさつてまで待てないのか。

カン子「明日になったら狐の親子は死ぬでしょう。あさつてになったら、私が今度は生きてはいません。

シロウ「ええい、よし、分かった分かった。仕方のないやつだな。セロをやるよ。これを持つていつてお金にかえて、狐の親子でも狸でも何でも助けてやりな。

カン子「はい、ではいつてまいります。今度はここに帰つてこれるかどうかわかりませんので、ここでさようならにします。さ・よ・う・な・ら。

シロウ「はいはい。さようなら。

カン子の燕、セロを抱えて飛んでいった。

シロウ「ふざけた鳥だなまったく。しかし、俺だつてふざけてるよ。なけなしのセロをやつまつたんだからな。・・・しかし、なんかせいせいしたな。セロがなくなつたつて、セロくらい弾けるような、そんな気がしてきたぜ。ずいぶん俺もくたびれていたんだ。そうだ。俺はきつと、ずいぶんくたびれていたんだ。・・・

シロウ、座るとセロを弾く音を口で真似て出してみる。

溶暗して、スポットがシロウのゴーシュをとらえる。

影の声、楽長らしい。

——何だつて！セロが無い！どうするんだ。君の部分はどうするんだ。演奏会はどうするんだ。観客がまつているんだぞ。

シロウ「セロを弾く真似つてのはどうでしょう。

——気でも狂つたのか。

シロウ「とにかくやってみます。昔、『嵐を呼ぶ男』でユウちゃんがドラムのスティックを落として、それで追い詰められて歌をうたつたでしょ。あれ、好きだったから、あんなふうによつてみます。

シロウ座ると、セロをもっている格好をして、まずトロイメライを口でやってみる。

それから、カッコーとやってみる。そして歌いはじめる。

シロウ「♪ 私はたくさんの人や 生き物や 空や森や炎や草に

たくさんのおそろったらしいのです

たくさん助けてもらったらいいのです

私はたくさんの人や 動物や 水や風や祭や歌を

たくさん たくさん 憎んだり 怒ったり 恨んだり したのに

まだ今日も生かされています

生まれてきたということ

死んでいくということ

長い暗闇のみちすじで

その一瞬の 光の粒子になれたことを

私はうれしいと 思っています

空や森や炎や草や 水や風や祭や歌や 街や砂や月夜や夢や

たくさん たくさん ひとつの ひとつと

私はいっしょに編まれている手鞠です

私がひとつであり たくさんひとつであり ひとつのたくさんであり

たくさんひとつがおなじであるという

この不思議なうちゅうを すてきだと思います

つばめのかっこう、あの晩はすまなかつたな。俺はおこつたんじゃないなかつたんだ。

ベートーベンの第六交響曲『田園』が流れてきて・・・

溶暗。

明るくなつて、シロウ、お辞儀して立っている。カン子も出てきて、一礼。

ややあつて狐たちの拍手・・・次第に大きく。

コンザブローが黍の団子を皿にのつけて登場。

コンザブロー「とてもステキでしたね。とてもよかったです。

シロウ・カン子「ありがとうございます。

コンザブロー「それではみなさん、少し休憩をいたしましょう。

狐たち欠伸をしたり伸びをしたり、ざわざわと。

コンザブロー「あなた方も、黍の団子を召し上がりなさい。(差し出す)

シロウ・カン子「はい。

と、何処からか風の声。

—— 狐の団子は兎(うさ)の糞。狐の団子は兎(うさ)の糞。・・・

シロウとカン子、皿に伸ばした手が止まる。

顔を見合わせる二人。シンとして見守る狐たち。シロウとカン子皿の黍団子を手にとつて食べた。

シロウ「美味しい。

カン子「美味しい。

皿ごと持つて席に着く。

コンザブロー「さてみなさん。次はいよいよケルルン博士の特別講義です。ケルルン博士は私たち狐少年学校の名誉教授です。みなさんのお兄さんも、そのまたお兄さんも、みいんなケルルン博士に教えていただいたのです。ではケルルン博士、お願いします。

ケルルン博士、演壇に立つとお辞儀した。
拍手。

ケルルン博士「ケルルンです。この一年、みなさんは森でいろいろなことを学んできました。私がここでお話することよりも、みなさんが一年かけて森で学んだことの方が大切なのです。森があなた方に教えた大切なことのひとつは何でしょう。あなた方がみた森の全ての中から、ひとつ言いなさい。さあ、手を挙げて・・・

狐たち、静かに、整然と手を挙げた。

ケルルン博士「コン作さん、

狐4「はい。森には、春がきました。

ケルルン博士「はい、そのとおりです。それから？

狐4「それから、夏がきて秋がきて冬になりました。

ケルルン博士「そのとおりです。たいへんよろしい。コン作さんお座りなさい。そうです。

そのとおりでした。森には春があり、夏があり、秋があり、冬がありました。そうして、森がそうであるのおなじように、狐のひとつひとつに、そして人のひとつひとつにもまた春夏秋冬があるのです。芽が出てのびて実をむすび、枯れて種を残して去っていきます。森も狐も人もおなじです。まったくちがうものどうしが、おなじなのです。この不思議さを私たちは大切にしましょう。

他に見たものはありますか？・・・コン六さん。

狐5「はい。光が湖に反射してキラキラしていました。

ケルルン博士「そうです。そして？

狐5 「木と木の間からも光がさしこんでいました。

ケルルン博士「そうです。よろしい。お座りなさい。・・・みなさんはもう学校で光が粒子だということを習いましたね。光の粒子を何と言いましたか？・・・コン平さん。

狐6 「フォトンです。

ケルルン博士「そうです、フォトンという粒子です。このフォトンという粒子は互いにぶつかっても、ゆるやかな反応しかしめません。もし、フォトンが互いにぶつかって大きなエネルギーを発したりするならば、私たちは水面に反射するキラキラとした光や、木もれ日や、堅雪の輝きも見られないでしょう。その光の粒子も束にすればレーザーのようなエネルギーの高いものになります。私たちの眼差しもまた光の粒子フォトンのなせる現象なら、レーザーとしての高出力エネルギーもまた、フォトンのなせる業です。光のなんと不思議なことでしょう。私たちはこの不思議さも大切にしましょう。

さあ、他に、森でしたことは何ですか？・・・コン太さん。

狐3 「はい。僕たちは、草原を走り回ってぶつかりっこをしました。

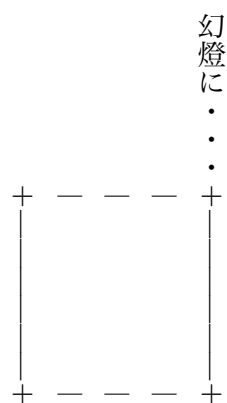
ケルルン博士「はい、それとてもよろしい。では、粒子のぶつかりっこを○と×の絵で考えてみましょう。

幻燈に・・・+

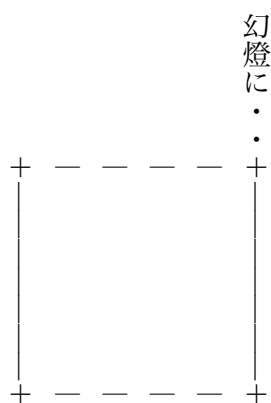
—○×—
+ — +

ケルルン博士「Aという素粒子とBという素粒子が反応してQとPという素粒子があらたに出来るとします。それはクオークという素粒子よりもまだ小さな粒子があつて、そのクオークが反応を引き起こしていると、人の科学は考えています。この究極の粒子、

クオークはまだ発見されていません。でも、狐の科学はそうは考えないのです。Aという粒子とBという粒子とのぶつかりっこ、ある関係によって、反応は起こると思います。それを絵にするとこういう絵になります。



ケルルン博士「さっきの○と×が重なったような絵でしょ。この○の部分はAという素粒子とBという素粒子が反応する、つまりひとつの関係をとりむすぶ近似値です。不確定性理論によって、素粒子の運動は観測不能ですから、絵にするとこういう○のうな漠然とした感じになるのです。



ケルルン博士「あなた方が森の草原でぶつかりっこをして遊んだように、粒子もまたぶつかりっこをして遊びながら、新しい粒子を生み、そして、物質となっていくのです。

どんなぶつかり方をするのかは、近似的です。その秘められた秩序に従うとしか言いようがありませんし、いきあたりばつたりのようにも見えます。質問はありますか？

狐7 「はい。」

ケルルン博士 「はい、コン子さん。」

狐7 「近似値というものについて、もう少し詳しく教えてください。」

ケルルン博士 「はい。それでは近似値ということについて、もう少し説明しましょう。近似値、具体的に言うならば、私たちのつかっている言葉は心の近似値です。心そのものをピタリといいあてる言葉というものはありません。私が愛と言い、あなたが愛というとき、この二つの「愛」はまったく同じではなく、近似値として関係しているのです。ですから私たちは時として言葉が心を裏切っているように感じます。そのひとつ、伝えたい心を言葉にしたときに、なかなか言葉にならない。言葉がみつからない。言葉が違うような気がする。こういう体験を私たちはよくもちます。もうひとつ、ほんとうの思いとは違って言葉が口から発せられているような気がして自己嫌悪に陥るということもあります。」

でも、平気で嘘をつくモノはいません。理想の語った言葉は現実の自分からみると嘘のように思えたりしますが、それはすべて言葉がどんな場合にも心の近似値として発せられるからです。それを私たちは恐れることはありません。嫌悪する必要ありません。」

この心と言葉のズレ、差異というものの、また、私の言葉とあなたの言葉のズレ、差異というものがあればこそ、言葉の近似値現象は熱力学の法則によって説明できるといえます。言葉のズレ、差異は相互の言葉の摩擦によってエネルギーを生み出すのだと考えてはどうでしょう。そうして言葉は次第に秩序だつていきます。エントロピーに反する現象です。」

混沌均衡に向かうのではなく、秩序に向かうのです。」

発せられたとき、混沌として互いに価値の違う言葉は、相互に摩擦しエネルギーを生じ、また浸透して関係をとりむすび、そうして秩序の織物を織り始めます。

しかし、果たして、このひろい宇宙をつらぬくような、秘められた秩序があるのか、あるいは、まったくこの宇宙の物質は確率でしか運動しないのか、それは、現在の人の科学でも、狐の科学でも分かっていません。分かっているのは、私たちは近似値としてしか今のところいろいろなものの答えをもっていないということです。

森には森の秩序があります。そうして森には森の確率と、近似値があるのです。

おわかりでしょう。・・・何か質問は？

狐8 「はい。

ケルルン博士 「はい、コンマさん。

狐8 「何もかもに春夏秋冬があるのなら、私たちは、死んでいくために生まれてくるのでしょうか。

ケルルン博士 「・・・私たちはいずれ死にます。この生きているという物理現象は終わるのです。しかし、それは絶望でしょうか。・・・もし、死ぬということが絶望なら、私たちは絶望に至るために生まれ生きていることになります。ごらん下さい。森は絶望していますか？いいえ、決してそうは見えません。私たちもそうでしょう。私たちは生まれてくるときも生きているときも、そうして死んでいくときですら、ナニモノかに包まれているのです。私たちをつつんでいるものとは何でしょう。それはこの森であり光であり闇であり、そうして私たちそれぞれ自身なのです。私たちは決して絶望につつまれているわけではありません。

お辞儀した。

拍手。

ケルルン博士は席に着いた。

カン子「難しい話だったね。

シロウ「うん。狐の学校は進んでいるんだな。

カン子「大人になったら分かるのかな。

ケルルン博士「いいえ。大人になったら、人はこういうことを忘れるんですよ。ですから、

今のうちに、しっかり森を見ておきなさい。

シロウ・カン子「はい。

コンザブローが出てきた。

コンザブロー「みなさん、これで狐少年学校の学芸会はおしまいです。この学芸会をもって、狐少年学校の、森の卒業式にしたいと思います。・・・今夜みなさんは深く心に留めなければならぬことがあります。この記念すべき日に出席してください。賢い、少しも酔わない人間のお子さんが、狐のこしらえた団子を食べてください。賢い、とです。そこでみなさんは、これから大人になっても、うそをつかず、人をそねまらず、私ども狐の今までの悪い評判をすっかりなくしてしまうだろうと思います。・・・シロウさん、カン子さん、これは今夜の記念とお礼に狐少年学校から送るものです。（トマトを出した）

カン子「あ、トマトだ。

シロウ「トマトだね。

コンザブロー「どうぞ受け取ってください。

シロウ・カン子「ありがとうございます。

コンザブロー「私どもはこれから故郷に帰ります。

シロウ「故郷？

カン子「狐の故郷って何処？」

コンザブロー「(空をゆびさした) あそこです。あの赤く輝く天体、火星です。私たちはあの火星の運河に帰るのです。」

シロウもカン子も狐たちも、シンとして火星を見つめる。

コンザブロー「・・・では最後に狐少年学校の校歌をうたいましょう。」

狐少年学校校歌



キックキック トントン キックキック トントン

ひるはカンカン日の光 夜はツンツン月あかり

たとえからだをさかれても 狐の生徒はうそいうな

キックキック トントン キックキック トントン

ひるはカンカン日の光 夜はツンツン月あかり

たとえこごえて倒れても 狐の生徒はぬすまない

キックキック トントン キックキック トントン

ひるはカンカン日の光 夜はツンツン月あかり

たとえからだがちぎれても 狐の生徒はそねまない

キックキック トントン キックキック トントン

コンザブロー「それでは人のシロウさんカン子さん、さようなら。狐たち「さようなら。」

狐たちそれぞれブーンと飛んで去っていく。ケルン博士も去り、コンザブローもシロウとカン子に一礼すると消えた。巨大なトマトの木も姿を隠し、森もまた見えなくなつて、あたりはまた一面の真つ白な銀世界だ。

カン子「お兄ちゃん、

シロウ「え？

カン子「みんな消えちゃったよ。

シロウ「うん。消えちゃったね。

カン子「やつぱりこれは、狐に化かされたんだろうか。

シロウ「そうだろうか。

カン子「化かされたんだね。

シロウ「(トマトを見せて) きつとそうじゃないさ。

カン子「(トマトを出して) ああ、きつとそうじゃないね。

シロウ「うん。

ふたり、どちらからともなく空を見上げる。

カン子「あ、火星だ。

シロウ「ああ、火星だ。あそこにみんな帰つて行つたんだ。

カン子「そうだね。きつとそうだ。

シロウ「あそこに火星がある。・ここにトマトがある。

カン子「あそこに火星がある。・ここにトマトがある。

シロウ「あそこに火星があつて、ここにトマトがある。(微笑む)

シロウ・カン子「あそこに火星がある！ここにトマトがある！・・・ばんざーい！バンザーイ！・・・

ふたり、トマトを差し出して、火星を見ている。
何処からか、冬の終わりを告げ、春の近いことを囁くようなワルツが聞こえてきた。

おしまい

さて、どうでしたか。今度の絵本は？・・・ちよつとは肩のこりがほぐれましたでしょうか。少しはストレスを忘れることができたでしょうか。
人の考えることもまだまだ、まんざらでもないやと、思えましたか。
私は、ほんの少しだけ、誰かとお茶を飲みたくなってきました。
そうして、火星のことなど話してみたくなってきました。
ですから、まずは、めでたし、めでたし・・・

1987, 11, 7

北村 想